

令和2年度
四国山地緑の回廊（剣山地区）
モニタリング調査結果

注:希少種が含まれる情報は公開していません。

令和3年2月4日
四国森林管理局
四国自然史科学研究センター

≪設定目的≫

緑の回廊は、国有林野内に設定された複数の保護林を連結するネットワークを形成し、森林生態系の構成者である野生生物の移動経路を確保し、生育・生息地の拡大と相互交流を促して、その多様性の保全を図るため。

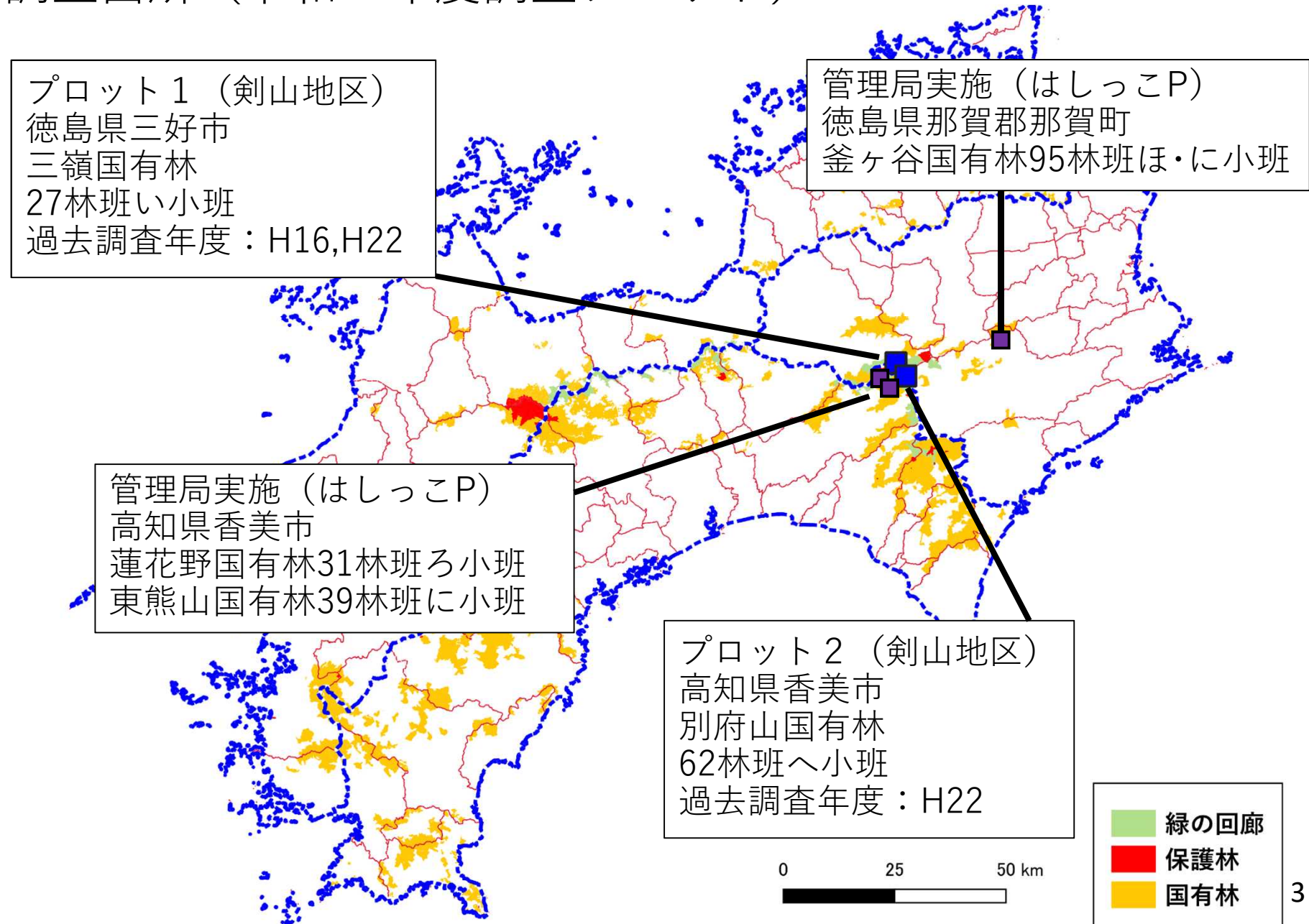
≪調査目的≫

野生生物の移動実態や森林施業との因果関係等を把握し、現況が緑の回廊としての機能発揮にふさわしい林分内容であるかどうか等を検証するため。

【令和2年度調査項目】

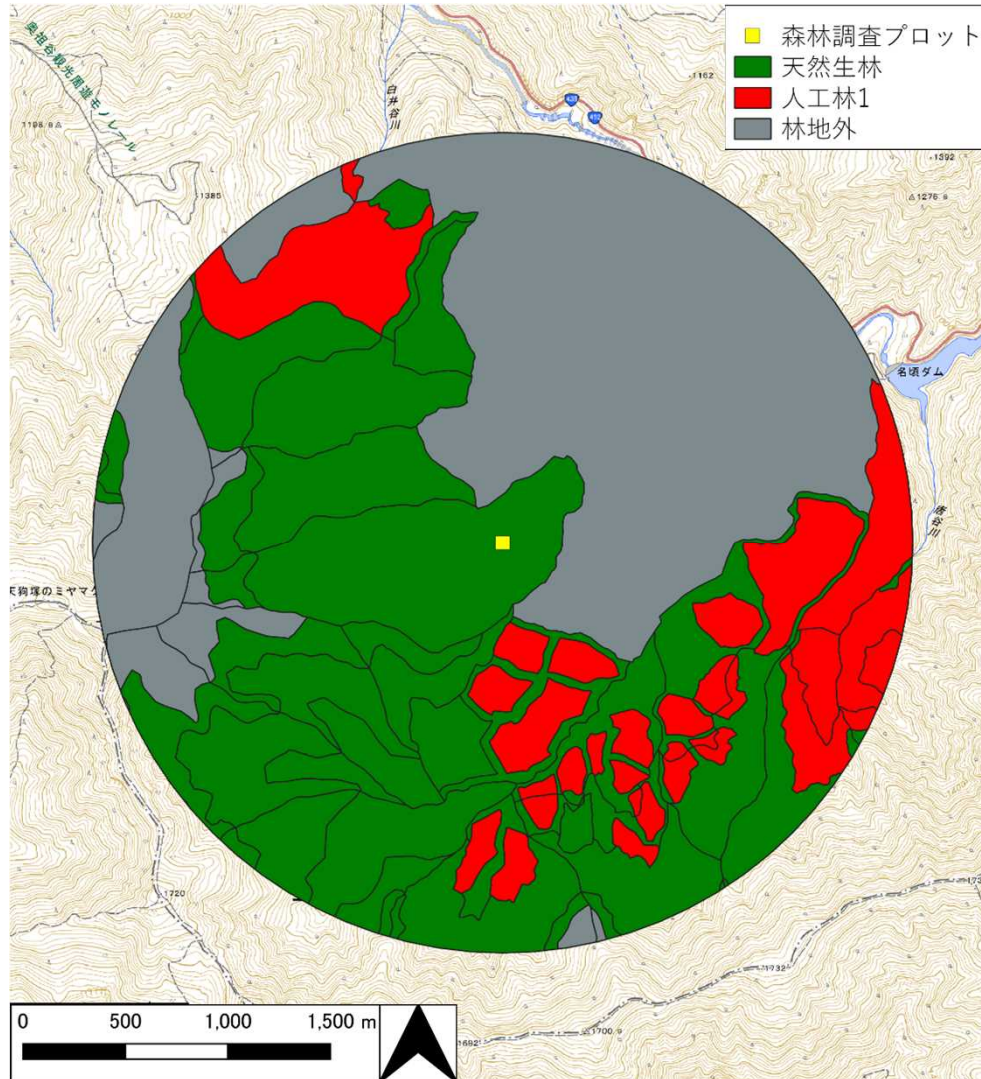
基礎調査		文献及び資料の整理
森林調査		プロット内を調査し、森林の種組成や構造、発達段階を把握する 調査項目：毎木調査、植生調査
哺乳類 調査	自動撮影カメラ調査	赤外線センサーカメラを設置し、森林に生息する動物相を把握する (設置期間：7月～12月)
	フィールドサイン調査	自動撮影カメラの補完として調査プロット内及び移動中にフィールドサイン等の確認を行う
	巣箱かけ調査	主にヤマネ・モモンガの生息状況等を把握するために、巣箱を設置し、訪れる動物及び痕跡を記録する
	ニホンジカ被害状況調査	調査プロットまでの移動経路沿いの3地点（起点・中間・終点）でニホンジカの被害状況を記録する
	コウモリ調査	ハーブトラップを設置し、捕獲調査を行い、種を把握する
鳥類調査		ラインセンサスとスポットセンサスを併用し、出現鳥類を記録する

調査箇所（令和2年度調査プロット）



基礎調査（森林情報図）

プロット1（三嶺国有林）

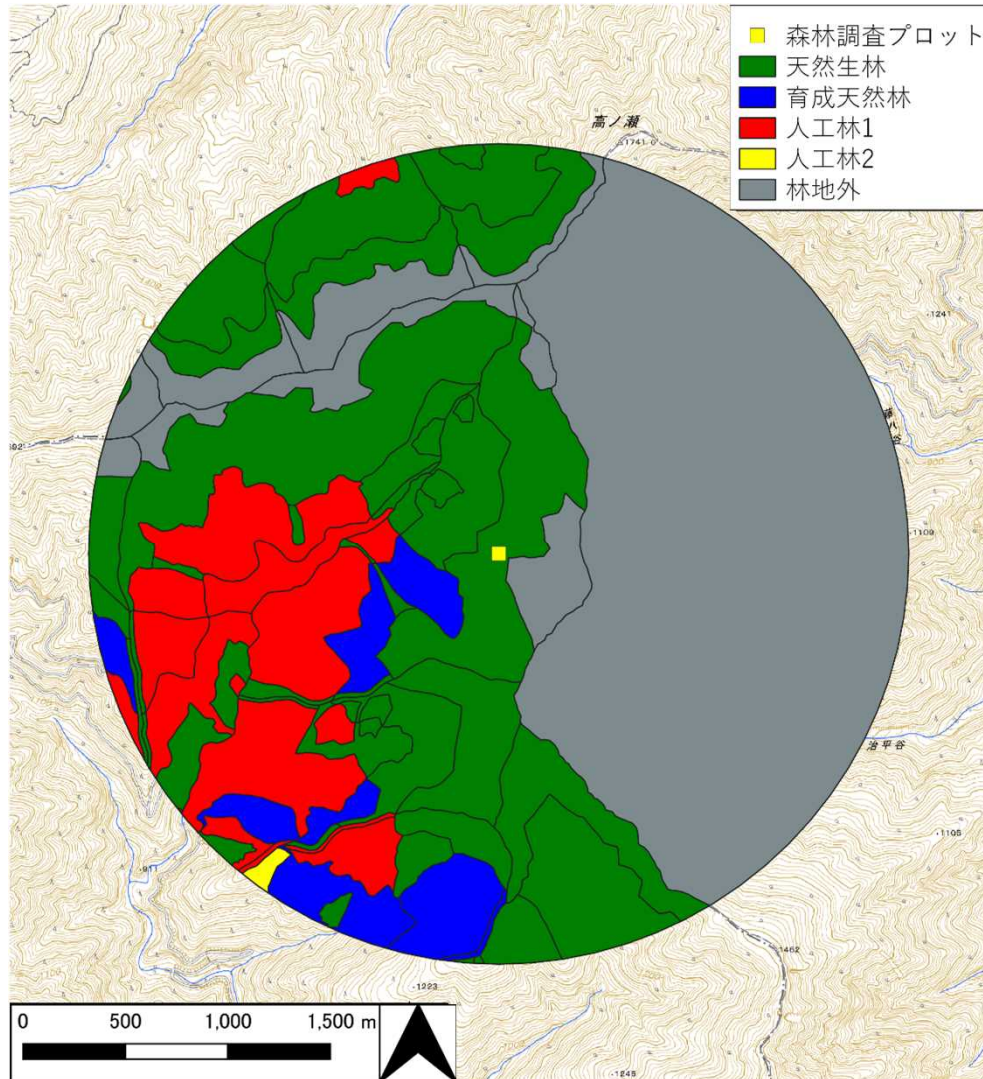


森林タイプ	全域	
	面積ha	割合%
天然生林	580.5	46.2
育成天然林	-	-
人工林1	197.8	15.8
人工林2	-	-
林地外	477.0	38.0
総計	1255.3	100.0

森林タイプ	区分方法（森林簿属性）	
	林種	林種細分
天然生林	天然生林	—
育成天然林	育成複層林 または 育成単層林	育成天然林
人工林1	育成複層林	育成天然林以外
	育成単層林	育成天然林以外 かつ 林齢が21年生 以上
人工林2	育成単層林	育成天然林以外
	育成単層林	育成天然林以外 かつ 林齢が20年生 以下
林地外	上記の区分に該当しない小班及び 国有林以外	

基礎調査（森林情報図）

プロット2（別府山国有林）



森林タイプ	全域	
	面積ha	割合%
天然生林	463.3	36.9
育成天然林	70.7	5.6
人工林1	159.4	12.7
人工林2	2.0	0.2
林地外	783.9	44.6
総計	1255.3	100.0

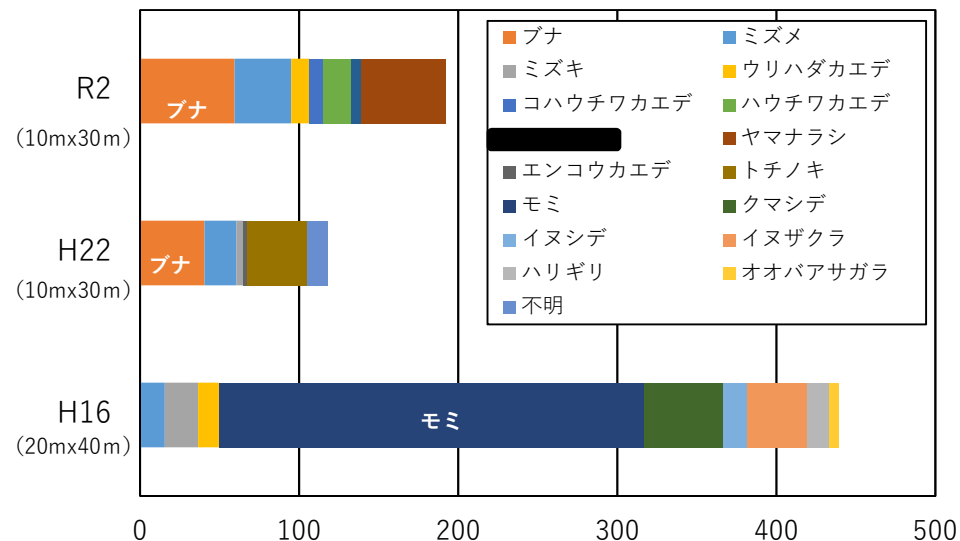
森林タイプ	区分方法（森林簿属性）	
	林種	林種細分
天然生林	天然生林	—
育成天然林	育成複層林 または 育成単層林	育成天然林
人工林1	育成複層林	育成天然林以外
	育成単層林	育成天然林以外 かつ 林齢が21年生 以上
人工林2	育成単層林	育成天然林以外
	育成単層林	育成天然林以外 かつ 林齢が20年生 以下
林地外	上記の区分に該当しない小班及び 国有林以外	

森林調査

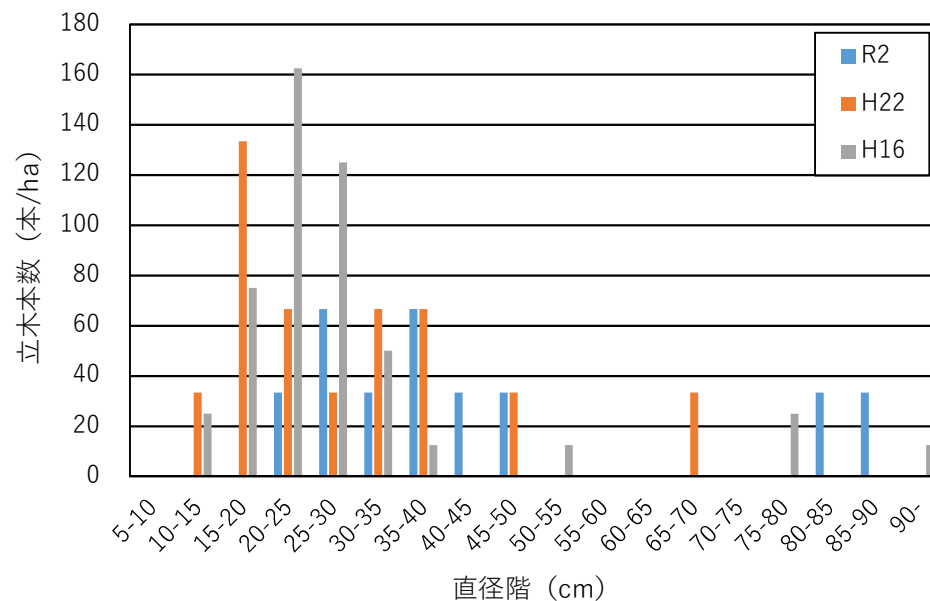
プロット 1 (三嶺国有林)

物理的環境	生態的環境
・プロット No.1	・林種 天然林
・面積 10m × 30m	・林相 ミ・シ ^レ 等針広混交林天然林
・林小班 三嶺 27い	・林齢 186年 (本年度時点)
・標高 1241m	・林分の発達状況 老齢
・地形 傾斜:20° 方位:N20W	・林分構造 (階層m 被度%) 高木層 28.0m 85% 亜高木層 14.0m 5% 低木層 8.0m 40% 草本層 0.1m 1%
特徴	
群落名	:ブナースズタケ群団
高木層	: [黒塗り] ブナ、ミズメ、ヤマナラシ等
亜高木層	:ミズメ
低木層	:モミ、ミズメ、ツタウルシ、コハウチワカエデ、ウリハダカエデ、ヒメシャラ等
草本層	:シシガシラ、モミ、ミヤマザクラ、ツルマサキ、ヤマナラシ、[黒塗り]、ケヤキ、コミネカエデ、エンコウカエデ等
その他	:過年度プロットに防鹿柵が設置されていたため、近傍に 新規プロット を設置した。

高木層の胸高断面面積合計 (m³/ha)



胸高直径階別の本数 (高木層)



森林調査 (低木層の比較)

プロット1 (三嶺国有林)

プロット面積	20m×40m	10m×30m	10m×30m	前回調査からの 変化
調査年度	H16	H22	R2	H22-R2
調査実施日	9月10日	9月14日	8月7日	(%)
低木層の被度の変化	20%	15%	40%	25%
種名	優占度			変化の度合
モミ	+	1	+	▼
ツガ	+			
アワブキ	1			
イヌザクラ	+			
ブナ		1		▼
イヌブナ	+			
ミズメ	+		1	△
クマシデ	+			
イヌシデ	+			
ツリバナ	+			
ツタウルシ			+	△
アサノハカエデ	+			
イロハモミジ	+			
ウリハダカエデ			1	△
コハウチワカエデ	1	+	+	
トチノキ	+			
ヒメシャラ	+	+	2	△
タンナサワフタギ	+	+	+	
エゴノキ	+		1	△
リョウブ	+	1	1	
アオダモ	+			
ムラサキシキブ	+	+		▼
アオハダ	+			
23種	20種	7種	9種	

ブラウン-ブランケの優占度級

ランク	定義
5	調査面積の75%以上を被う、個体数は問わない
4	調査面積の50~75%以上を被う、個体数は問わない
3	調査面積の25~50%以上を被う、個体数は問わない
2	調査面積の10~25%以上を被う、個体数は問わない
1	個体数が非常に多い、または、10%未満を被う
+	個体数は少数、ごくわずかを被う

凡例

- ▼ 前回確認されていて、今回確認されてなかった種
- △ 今回新たに確認された種
- ▼ 両年度とも確認された種のうち、大きく減少した種
- △ 両年度とも確認された種のうち、大きく増加した種



森林調査 (草本層の比較) (プロット1)

ブラウン-ブランケの優占度級	
ランク	定義
5	調査面積の75%以上を被う、個体数は問わない
4	調査面積の50~75%以上を被う、個体数は問わない
3	調査面積の25~50%以上を被う、個体数は問わない
2	調査面積の10~25%以上を被う、個体数は問わない
1	個体数が非常に多い、または、10%未満を被う
+	個体数は少数、ごくわずかを被う

凡例	
▼	前回確認されていて、今回確認されてなかった種
△	今回新たに確認された種
▼	両年度とも確認された種のうち、大きく減少した種
△	両年度とも確認された種のうち、大きく増加した種

【補足】レッドリスト掲載状況

種名	ランク
██████████	██████████
██████████	██████████

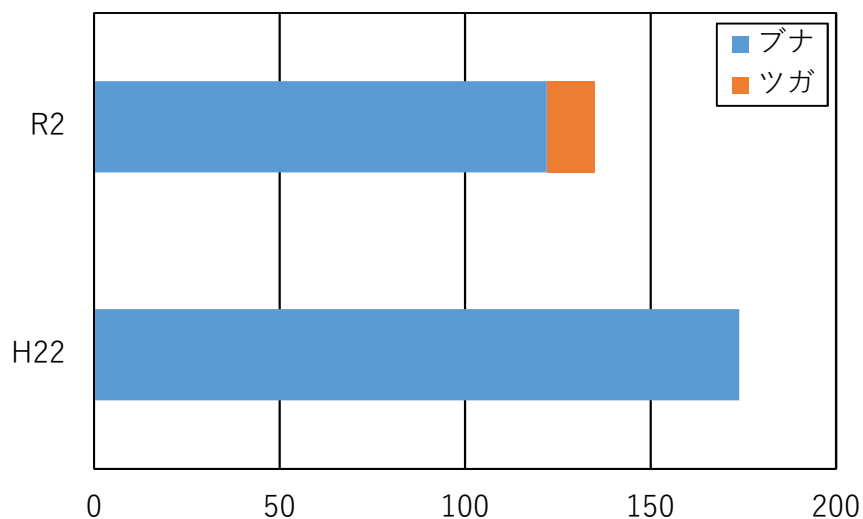
プロット面積	20m×40m	10m×30m	10m×30m	前回調査からの変化
調査年度	H16	H22	R2	H22-R2
調査実施日	9月10日	9月14日	8月7日	(%)
草本層の被度の変化	80%	3%	1%	-2%
種名	優占度			変化の度合
ヒカゲノカズラ		+		▼
フモトシダ		+		▼
トラノオシダ		+		▼
メンダ属の一種			+	△
シケシダ		+		▼
シシガシラ	+		+	△
シダsp.	+			
モミ	+		+	△
テンナンショウ属の一種		+	+	
カンスゲ	2			
スゲ属の一種		+	+	
スズタケ	4	+		▼
ナンテン		+		▼
ミヤマザクラ			+	△
██████████			+	△
ケヤキ			+	△
ツルマサキ			+	△
ヤマナラシ			+	△
ヤマウルシ		+		▼
コミネカエデ			+	△
エンコウカエデ			+	△
ウリハダカエデ			+	△
コハウチワカエデ			+	△
カエデ属の一種		+		▼
ツルシキミ	2			
ミヤマシキミ		+		▼
イワガラミ	+	+	+	
ヤマボウシ			+	△
エゴノキ			+	△
リョウブ		+		▼
テイカカズラ		+		▼
██████████		+		▼
アオハダ			+	△
タニギキョウ			+	△
タラノキ		+		▼
35種	9種	16種	19種	

森林調査

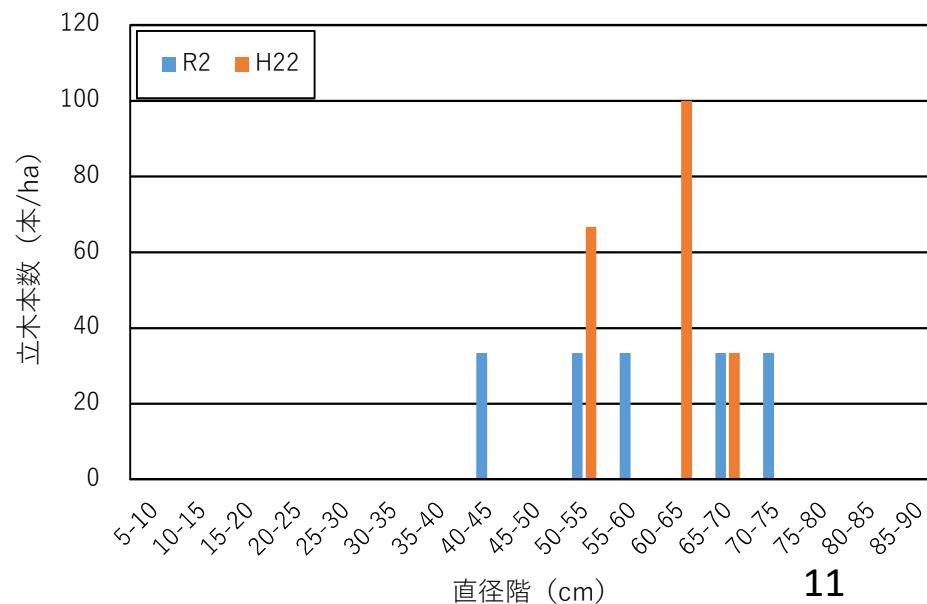
プロット 2 (別府山国有林)

物理的環境	生態的環境
・プロット No.2	・林種 天然林
・面積 10m × 30m	・林相 針広混交天然林
・林小班 別府山 62へ	・林齢 240年 (本年度時点)
・標高 1484m	・林分の発達状況 老齢
・地形 傾斜:29° 方位:W	・林分構造 (階層m 被度%) 高木層 23.0m 60% 亜高木層 10.0m 5% 低木層 15.0m 2% 草本層 10.1m 15%
特徴	
群落名	:ブナースズタケ群団
高木層	:ツガ、ブナ
亜高木層	:ナツツバキ
低木層	:ミヤマノキシノブ、リョウブ等
草本層	:ミヤマワラビ、ウラジロモミ、ヤマヌカボ、スズタケ、ブナ、コミネカエデ、ヤマタニソバ、ミズキ、ヒメシャラ、リョウブ、タラノキ等
その他	:プロット杭が全て流されており、過年度撮影の写真から杭の位置を推測し復元した。

高木層の胸高断面面積合計 (m³/ha)



胸高直径階別の本数 (高木層)



森林調査 (低木層の比較)

プロット 2 (別府山国有林)

別府山プロット面積: 10m×30m = 300m ²			
調査年度	H22	R2	変化率 (%)
調査実施日	9月16日	8月11日	
低木層の被度の变化	10%	2%	-8%
種名	優占度		変化の度合
ミヤマノキシブ		+	△
リョウブ	1	1	
枯死木	+		▼
2種	1種	1種	

ブラウン-ブランケの優占度級

ランク	定義
5	調査面積の75%以上を被う、個体数は問わない
4	調査面積の50~75%以上を被う、個体数は問わない
3	調査面積の25~50%以上を被う、個体数は問わない
2	調査面積の10~25%以上を被う、個体数は問わない
1	個体数が非常に多い、または、10%未満を被う
+	個体数は少数、ごくわずかを被う

凡例

- ▼ 前回確認されていて、今回確認されてなかった種
- △ 今回新たに確認された種
- ▼ 両年度とも確認された種のうち、大きく減少した種
- △ 両年度とも確認された種のうち、大きく増加した種



森林調査 (草本層の比較) (別府山国有林)

別府山プロット面積: 10m×30m = 300㎡			
調査年度	H22	R2	変化率 (%)
調査実施日	9月16日	8月11日	
草本層の被度の变化	25%	15%	-10%
種名	優占度		変化の度合
トラノオシダ	+		▼
ミヤマワラビ		+	△
ヘビノネゴザ		+	△
シシガシラ	+	+	
ウラジロモミ		+	△
ツガ	+	+	
イ		+	△
コカンスゲ	+	+	
ヤマヌカボ		+	△
スズタケ	3	+	▼
ナガバモミジイチゴ	+		▼
ブナ	+	+	
ナガサキオトギリ		+	△
ミヤマタニタデ	+		▼
イロハモミジ	+		▼
コミネカエデ	+	+	
コハウチワカエデ		+	△
ミヤマタニソバ		+	△
イワガラミ	+	+	
ミズキ		+	△
ヒメシャラ		+	△
リョウブ	+	+	
タラノキ		+	△
23種	12種	19種	

ランク	定義
5	調査面積の75%以上を被う、個体数は問わない
4	調査面積の50～75%以上を被う、個体数は問わない
3	調査面積の25～50%以上を被う、個体数は問わない
2	調査面積の10～25%以上を被う、個体数は問わない
1	個体数が非常に多い、または、10%未満を被う
+	個体数は少数、ごくわずかを被う

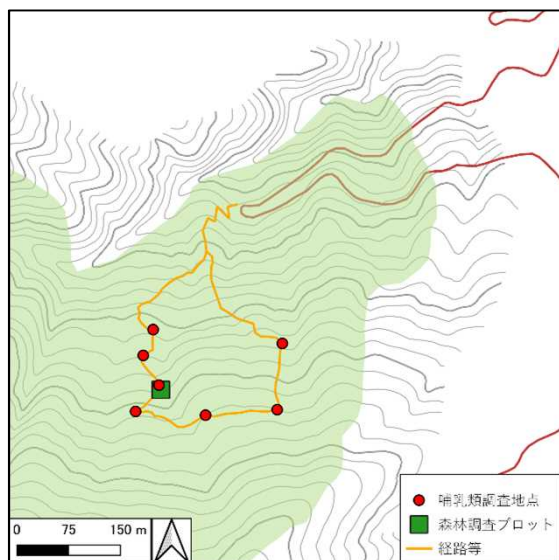
▼	前回確認されていて、今回確認されてなかった種
△	今回新たに確認された種
▼	両年度とも確認された種のうち、大きく減少した種
△	両年度とも確認された種のうち、大きく増加した種



ブナの実生

哺乳類調査（自動撮影カメラ調査）

プロット 1（三嶺国有林）

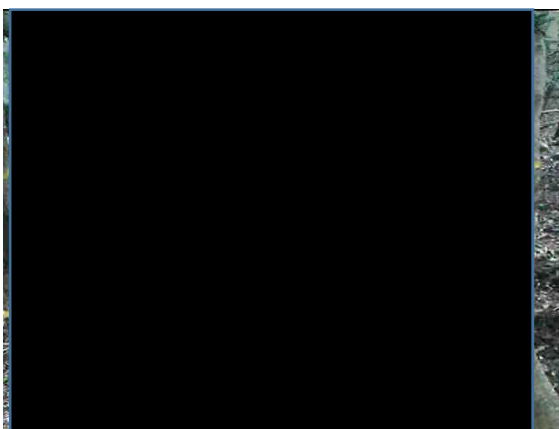


年度	期間	カメラ数
H16	8/9-11/28	4台
H22	6/3-10/26	3台
R2	7/16-11/28	7台 (クマ用3,巣箱1含む)

【補足】レッドリスト掲載状況

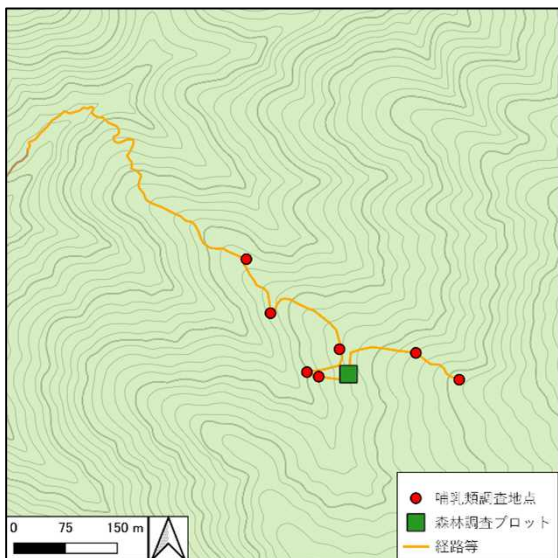
種名	ランク
[Redacted]	[Redacted]
[Redacted]	[Redacted]
[Redacted]	[Redacted]

No.	種名	H16	H22	R2
1	ヤマドリ	○	○	
2	カケス		○	
3	ハシブトガラス		○	
4	[Redacted]		○	
小計		1種	4種	0種
5	ニホンザル		○	○
6	ニホンリス		○	
7	ネズミ科		○	
8	ニホンノウサギ	○		
9	コウモリ目	○		
10	ハクビシン	○		
11	タヌキ	○	○	○
12	アカギツネ			○
13	[Redacted]	○		○
14	ニホンテン	○	○	○
15	アナグマ			○
16	イノシシ		○	○
17	ニホンジカ	○	○	○
18	[Redacted]	○		○
小計		8種	7種	9種
合計		9種	11種	9種



哺乳類調査（自動撮影カメラ調査）

プロット 2（別府山国有林）

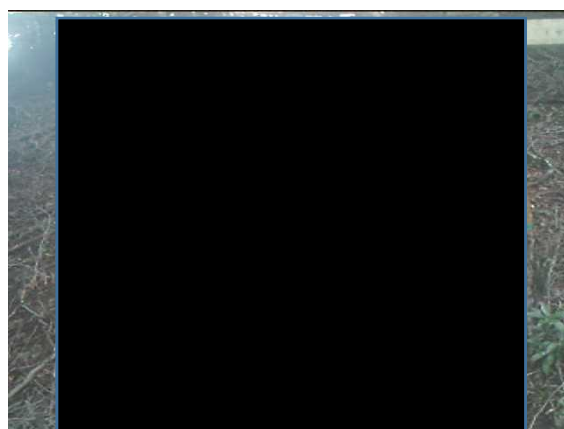
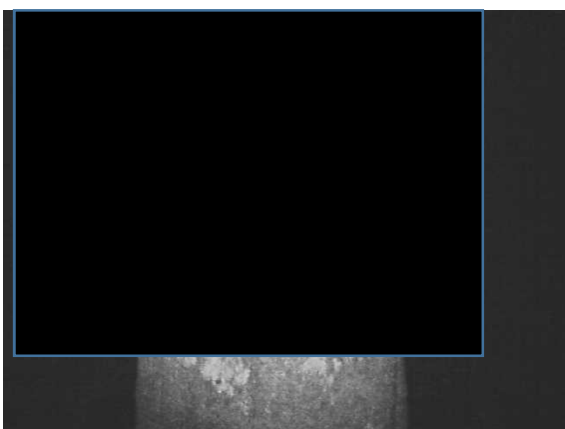


年度	期間	カメラ数
H22	6/6-11/1	3台
R2	8/13-11/28	7台 (クマ用3,巣箱1含む)

【補足】レッドリスト掲載状況

種名	ランク
[REDACTED]	[REDACTED]
[REDACTED]	[REDACTED]

No.	種名	H22	R2
1	カケス	○	
2	ヤマガラ		○
3	シジュウカラ		○
4	ゴジュウカラ		○
小計		1種	3種
5	ニホンザル	○	○
6	ニホンリス	○	
7	[REDACTED]	○	○
8	ネズミ科		○
9	ハクビシン		○
10	タヌキ	○	○
11	アカギツネ		○
12	ニホンテン	○	○
13	アナグマ	○	○
14	イノシシ		○
15	ニホンジカ	○	○
16	[REDACTED]	○	○
小計		8種	11種
合計		9種	15種

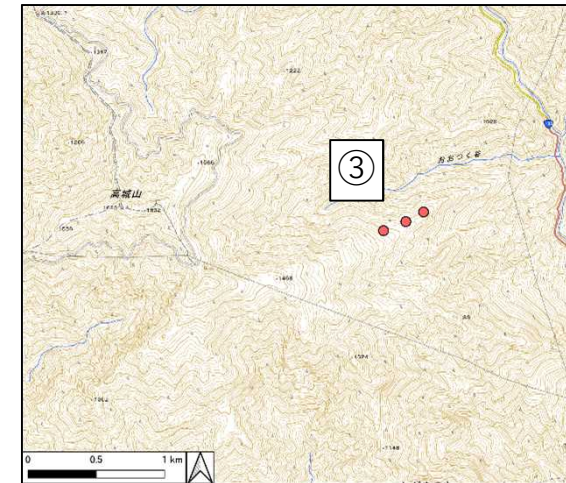
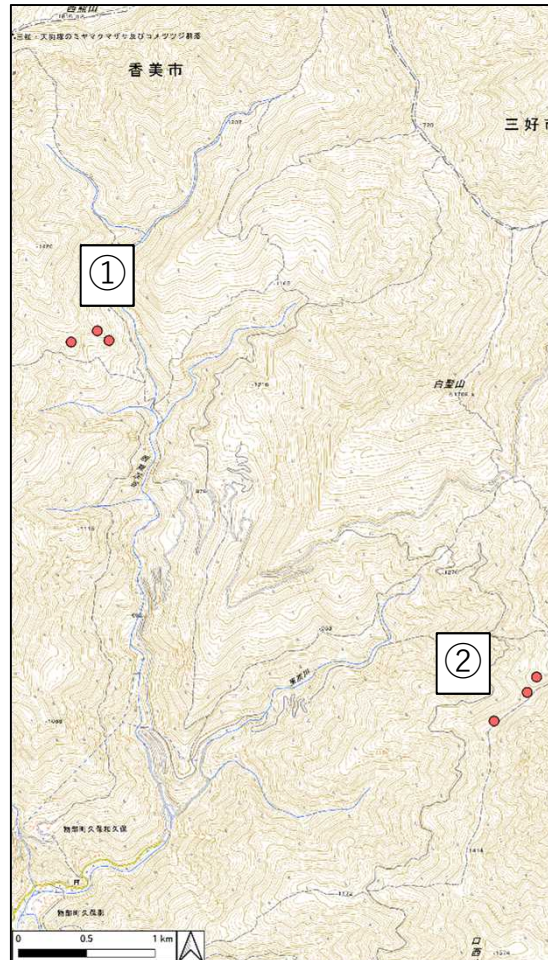


哺乳類調査（自動撮影カメラ調査）

管理局実施（はしっこプロジェクト）

No.	国有林名	期間	カメラ数
①	蓮花野	6/29-12/9	3
②	東熊山	6/29-12/9	3
③	釜ヶ谷	6/17-12/7	3

No.	種名	①	②	③
1	ニホンザル	○	○	○
2	ニホンリス	○		
3	■■■■■			○
4	ネズミ科		○	
5	ハクビシン	○		
6	タヌキ	○	○	○
7	アカギツネ	○	○	
8	■■■■■		○	
9	ニホンテン			○
10	イタチ科	○	○	○
11	アナグマ	○		○
12	イノシシ	○	○	○
13	ニホンジカ	○	○	○
14	■■■■■			○
合計種数		9	8	9



哺乳類調査 (ニホンジカ被害状況調査)

プロット1
(三嶺国有林)

シカ被害レベル判定のための
簡易版チェックシート (改訂版)

調査日 _____ 調査者名 _____

調査地点名 _____ 標高 _____ m GPS No. _____ 写真 No. _____

種生タイプ: 雑木林 常緑広葉樹林 落葉広葉樹林 針葉樹林

地形: 尾根上 斜面 谷

微地形: 平地 傾斜地 凹地 凸地

Start

シカの痕跡がある ※1 → NO → 補生被害レベル0

YES → 補生被害レベル4

高木の倒伏・立ち枯れが目立つ ※2 → YES → 補生被害レベル4

NO → 補生被害レベル3

ササ類の食害による枯死・矮小化 ※3 → YES → 補生被害レベル3

NO → 補生被害レベル3

ディアラインが認められる林内の見通しが良い (高さ0~1.5m程度) ※4 → YES → 補生被害レベル3

NO → 補生被害レベル3

林床の草本類はほとんどなく裸地に近い ※5 → YES → 高木の枝葉が繁っていて林内が暗いまたは尾根の乾燥地 ※6 → NO → 補生被害レベル3

NO → 補生被害レベル2

YES → 草本・低木 (1.5m程度) は忌避植物ばかりが目立つ ※7 (調査コドラートの30%以上) → YES → 忌避植物の優占度が調査コドラートの50%以上である → YES → 補生被害レベル3

NO → 補生被害レベル2

YES → 補生被害レベル2

草本・木本の萌芽に食痕が多いまたは目立つ一見してシカの被害とわかる → YES → 補生被害レベル2

NO → 補生被害レベル1

YES → 補生被害レベル1

草本・木本萌芽に食痕が散見される。補生は豊かに繁茂 → YES → 補生被害レベル1

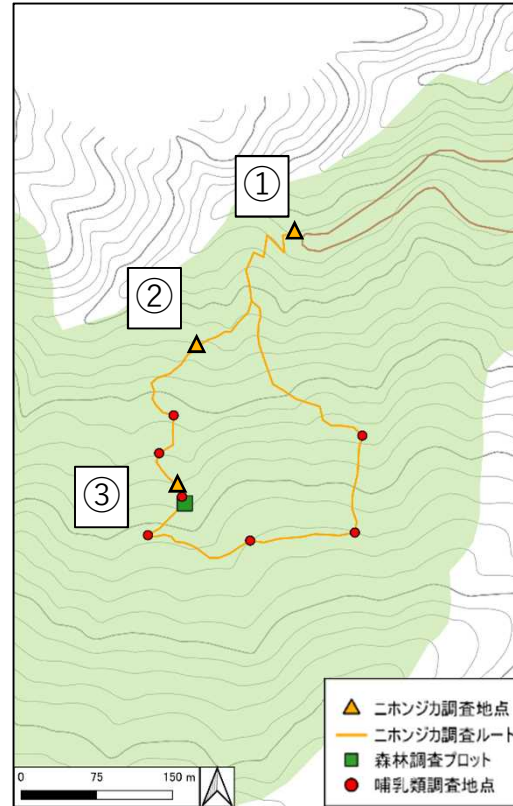
NO → 補生被害レベル0

YES → 補生被害レベル0

草本・木本萌芽に食痕はない補生は豊かに繁茂 ※8 → YES → 補生被害レベル0

メモ

※1 シカの目撃、声、糞、角こすり、食痕などを探してみる。足跡やシカ道はイノシシとの区別がむずかしいので注意。
 ※2 高木は森の樹冠を形成する樹木。シカにより林床の植物が減少すると、乾燥に弱いブナなどが影響を受ける。
 ※3 ササ類はシカの嗜好植物。シカの高密度地域では、スズタケなどがすでに消失している場所も多い。本来ササ類がない場合はNOへ。
 ※4 シカの口がとどく範囲である高さ1.5m程度までの植物がシカから食べられるので、林内の見通しが良くなる。
 ※5 シカの食害が多くなると、シカがそれまで食べなかったものまで食べるので林床植物が減少する。
 ※6 林内が暗かったり、乾燥した場所では、もともと林床に草本類が少ない場所も多い。
 ※7 シカの食害が多くなると、シカの嫌いな植物だけが生き残るため多様性が失われる。数種類の忌避植物だけになってしまう。
 ※8 発達した人工林では林床植生が本来ない場合がある。この項目がNOのときは調査コドラートの周辺にシカによる根刈り、樹皮剥ぎ等の痕跡を探してみる。痕跡がある場合は補生被害レベル3と判断する。



No.	調査地区	被害ランク
1	三嶺	3
2	三嶺	3
3	三嶺	3



哺乳類調査 (ニホンジカ被害状況調査)

プロット2 (別府山国有林)

シカ被害レベル判定のための
簡易版チェックシート (改訂版)

調査日 _____ 調査者名 _____

調査地点名 _____ 標高 _____ m GPS No. _____ 写真 No. _____

種生タイプ: 雑木林 常緑広葉樹林 落葉広葉樹林 針葉樹林

地形: 尾根上 斜面 谷

微地形: 平地 傾斜地 凹地 凸地

Start

シカの痕跡がある ※1 → NO → 補生被害レベル0

YES → 補生被害レベル4

高木の倒伏・立ち枯れが目立つ ※2 → YES → 補生被害レベル4

NO → 補生被害レベル3

ササ類の食害による枯死・矮小化 ※3 → YES → 補生被害レベル3

NO → 補生被害レベル3

ディアラインが認められる林内の見通しが良い (高さ0~1.5m程度) ※4 → YES → 補生被害レベル3

NO → 補生被害レベル3

林床の草本類はほとんどなく裸地に近い ※5 → YES → 高木の枝葉が繁っていて林内が暗いまたは尾根の乾燥地 ※6 → NO → 補生被害レベル3

YES → 補生被害レベル2

NO → 補生被害レベル2

YES → 補生被害レベル3

NO → 補生被害レベル2

YES → 補生被害レベル3

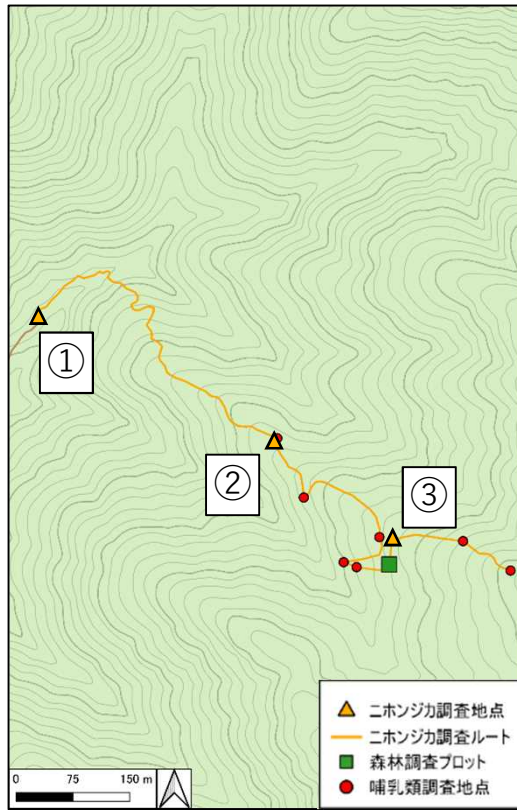
NO → 補生被害レベル1

YES → 補生被害レベル2

NO → 補生被害レベル0

YES → 補生被害レベル0

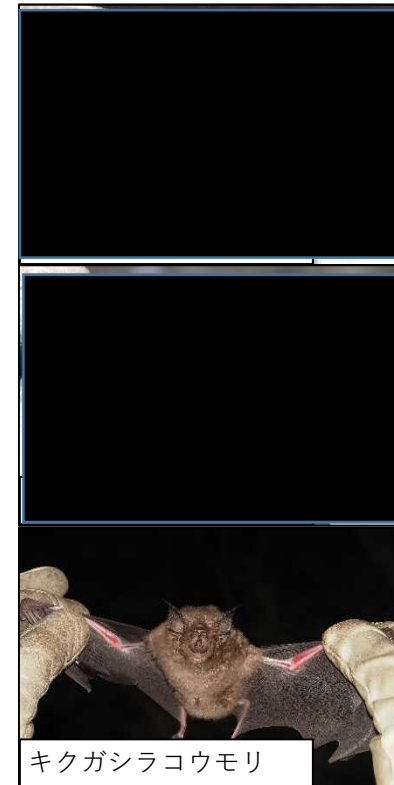
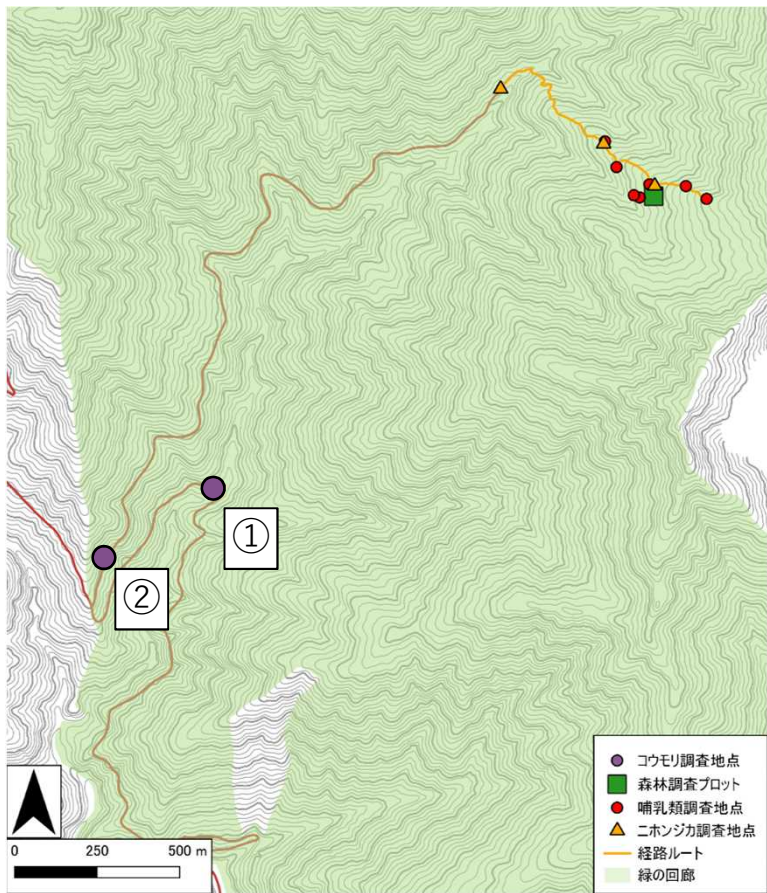
※1 シカの目撃、声、糞、角こすり、食痕などを探してみる。足跡やシカ道はイノシシとの区別がむずかしいので注意。
 ※2 高木は森の樹冠を形成する樹木。シカにより林床の植物が減少すると、乾燥に弱いブナなどが影響を受ける。
 ※3 ササ類はシカの嗜好植物。シカの高密度地域では、スズタケなどがすでに消失している場所も多い。本来ササ類がない場合はNOへ。
 ※4 シカの口がとどく範囲である高さ1.5m程度までの植物がシカから食べられるので、林内の見通しが良くなる。
 ※5 シカの食害が多くなると、シカがそれまで食べなかったものまで食べるので林床植物が減少する。
 ※6 林内が増かたつ、乾燥した場所では、もともと林床に草本類が少ない場所も多い。
 ※7 シカの食害が多くなると、シカの嫌いな植物だけが生き残るため多様性が失われる。数種類の忌避植物だけになってしまう。
 ※8 発達した人工林では林床植生が本来ない場合がある。この項目がNOのときは調査コドラートの周辺にシカによる根刈、樹皮剥ぎ等の痕跡を探してみる。痕跡がある場合は補生被害レベル3と判断する。



No.	調査地区	被害ランク
1	別府山	3
2	別府山	3
3	別府山	4



哺乳類調査 (コウモリ調査) プロット 2 周辺 (別府山国有林)

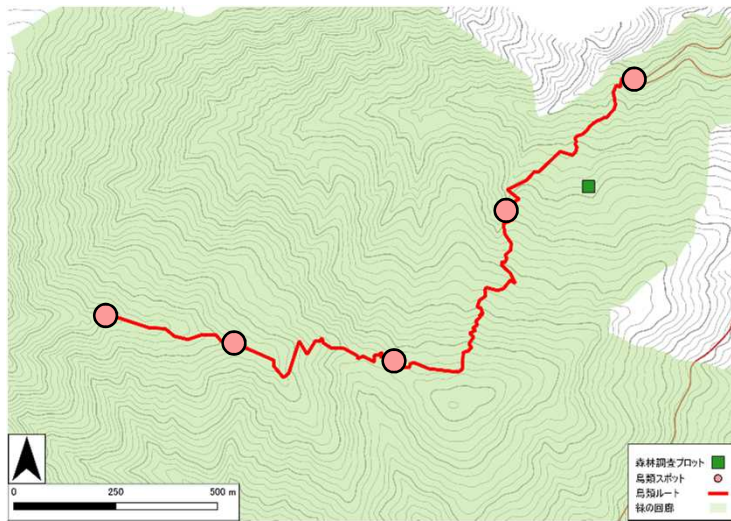


No.	調査日	座標
1	8/24-25	33.80858,134.01755
2	10/20-21	33.80670,134.01405

種名	捕獲頭数				レッドリスト 掲載状況
	8月		10月		
	①	②	①	②	
[Redacted]	1	5	0	0	[Redacted]
[Redacted]	1	1	0	0	[Redacted]
キクガシラコウモリ	0	0	0	1	

鳥類調査（プロット1（剣山地区）三嶺国有林 徳島森林管理署管内）

調査時期	H16	R2
夏季	7/13	7/29
冬季	11/24	11/22



No.	科名	種名	H16 ^{※1}		R2 ^{※1}		環境省 RL	徳島県 RL	比較結果 ▲: R2新規 ▼: R2未確認
			夏季	冬季	夏季	冬季			
1	ハト	アオバト	3						▼
2	カッコウ	ホトトギス	1						▼
3		カッコウ	1						▼
4	タカ					1	NT	NT	▲
5	キツツキ	コゲラ	2	2	2	6			
6					1	2		NT	▲
7		アオゲラ	1	1		1			
8	サンショウクイ	サンショウクイ				1	※2	※2	▲
9	カラス	カケス	2	1	3				
10		ハシボソガラス			1	3			▲
11		ハシブトガラス	1	1		1			
12	シジュウカラ	コガラ	1		1	19			
13		ヤマガラ	1	3	14	10			
14		ヒガラ	18	11	5				
15		シジュウカラ	2						▼
16	ツバメ	イワツバメ			2				▲
17	ウグイス	ウグイス	15		2				
18		エナガ	2		11	3			
19	ムシクイ		1					DD	▼
20	チメドリ	ソウシチョウ			2				▲
21	ゴジュウカラ	ゴジュウカラ	3	2	19	9			
22	キバシリ			1				VU	▼
23	ミンサザイ	ミンサザイ		4	2	2			
24	カワガラス	カワガラス				1			▲
25	ヒタキ		1		5			NT	▲
26		シロハラ		1					▼
27			1		6			VU	▲
28			2	1	2	2		DD	▲
29		キビタキ			2				▲
30		オオルリ	2						▼
31	イワヒバリ			1				VU	▼
32	セキレイ	キセキレイ				1			▲
33	アトリ	アトリ				24			▲
34		カワラヒワ			1				▲
35		ウン				2			▲
36		イカル				20			▲
計	19科	44種	19種	12種	18種	18種	1種	9種	新規13種
			23種		27種		-	-	未確認9種
			60個体	29個体	81個体	108個体	-	-	-
		個体数	89個体		189個体		-	-	-

※1 H16年度はラインセンサス、R2年度はラインセンサス及びスポット調査を含む

※2 サンショウクイは、亜種リュウキュウサンショウクイに該当するが、環境省RLでは亜種サンショウクイとしての選定であるため希少種には該当しない。「日本産鳥類目録第7版」では、亜種サンショウクイと亜種リュウキュウサンショウクイは区別されていないため、本表ではサンショウクイとして記載した。

調査結果まとめ

《プロット1 三嶺国有林》

◆ 森林調査

調査プロットが過年度（H16,H22）と異なっているため直接的な比較はできないが、草本層の被度が低下しており、裸地に近い状態となっていた。

- ▶ 過年度調査（H16,H22）においてもシカの被害が確認されている。本年度のニホンジカ被害状況調査では、森林調査プロット周辺は被害レベル3と判定され、シカによる植生への影響が考えられた。

◆ 哺乳類調査

自動撮影カメラ調査によって鳥類0種、哺乳類9種が確認された（H16;鳥類1種、哺乳類8種、H22;鳥類4種、哺乳類7種）。過年度調査と比較し、哺乳類ではアカギツネとアナグマが新たに確認され、H22は確認されなかった [] が確認された。その他に希少種として [] が確認された。

◆ 鳥類調査

調査では27種が確認された。H16（23種）と比較して4種増加し、新規確認種は12種、未確認種は9種であった。過年度調査とは種組成に多少の違いが見られたが、確認種は大部分が森林性の種であり、鳥類の生息地として森林環境維持されている。一方、コマドリやウグイスなど林床植生環境を好む種の確認は限られた。新たに [] といった絶滅の危険性が高い種が今回の調査では確認された。

- 森林環境が維持され「緑の回廊」としての機能を果たしている。
- しかし、ニホンジカの食害により下層植生が衰退しており、「緑の回廊」としての機能を低下させている可能性がある。

